胃食道逆流と呼吸器疾患について診断における各検査方法の有用性の検討：Fスケール、胃内視鏡、耳鼻科所見

小柳久美子1)2)、灰田美知子1)2)、高松富佐子2)
半蔵門病院　アレルギー呼吸器内科1)、 エパレク (環境汚染等から呼吸器患者を守る会)2)

【目的】外来通院中の患者に対してGERDの存在を疑って診療にあたることは有用である。特に呼吸器外来では乾性咳嗽で受診する症例にGERDが多く、素早く確実にGERDを診断することは重要である。早期診断と治療の一助とするために、Fスケール、耳鼻科、胃内視鏡を用いた所見について、診断の実際を報告し考察する。

【対象・方法】既に慢性疾患で通院中の患者のうち何らかの消化器症状を主訴として胃内視鏡に同意した患者30例についてFスケール、胃内視鏡、耳鼻科所見、呼吸器疾患の有無を解析した。

【結果】胃内視鏡で所見がなくても耳鼻科内視鏡で診断される率が比較的高い結果が導きだされたことは、耳鼻科診断が重要な位置づけにあると考えられる。耳鼻科の所見については決まった基準がなく、所見の点数化などがあればより簡便である。当日、典型的な食道所見と咽頭所見を供覧し文献と合わせ、所見の解離について考察する。